



カラーで見る
学校だより



おおやっ子



養父市立大屋小学校 令和7年10月31日 発行

マラソン大会 ～暑さに負けず練習の成果発揮～ 10/17

秋とはいえ10月に入っても気温と湿度が高い日が続くなか、子どもたちは業間マラソンや体育の授業でマラソン大会に向けて一生懸命練習に励んできました。

マラソン大会当日は、登校してきたときから走る気満々の児童が多く、学校中が活気に満ちあふれていました。低学年の児童の中には「楽しみすぎて朝早く目が覚めました。」と担任に話している子もいたそうです。低学年からスタートしたマラソン大会は、走るのが苦手な子も得意な子も、全力を出し切ることができました。学年を越えて、子どもたちの応援の声が響き渡り、清々しい大会となりました。

保護者の皆様、地域の皆様、温かいご声援ありがとうございました。また、交通監察係をお願いしました保護者の皆さんには、子どもたちのためにご支援いただき、本当にありがとうございました。



沿道での応援、ありがとうございました

大屋小中運動会保護者アンケートから

9月20日（土）に開催しました大屋小中運動会のアンケートに、多くの保護者の皆様からお答えいただきました。一部ですがご紹介いたします。

※小学校だけで41名の方から感想等をいただきました。ありがとうございました。

● 小中合同のメリット

- ・人数が増え、盛り上がりが出てよかった。
- ・応援もにぎやかで、一体感があった。
- ・一度で済むことで日程的・準備的に助かった。
- ・中学生の迫力ある演技が見られてよかった。
- ・中学生がしっかりしていて、小学生への手助けなどが見られた。

● 小中合同の課題

- ・交流の場が少なく、別々に運動会をやっているように感じた。
- ・小学校最後の運動会は、小学校だけで開催してほしかった。
- ・合同開催の決定や内容決定が急で戸惑った。

●運営の工夫・配慮

- ・室内で昼食や休憩ができて体調面で安心できた。
- ・撮影スペースが設けられていてよかった。
- ・開閉開式、競技進行がスムーズでよかった。

●子どもたちの成長・姿勢

- ・高学年としての責任感や自覚が見られた。
- ・笑顔で最後までやり切る姿に感動した。
- ・表現や演技に一生懸命取り組む姿が素晴らしかった。
- ・中学生の姿が小学生に良い刺激になっていた。

●その他

- ・小中混合チームによるリレー・応援合戦など一体感ある取り組みがあるとよいと感じた。
- ・撮影スペースの増設。保護者テントが離れていて演技が見づらかった。
- ・音響設備の改善。プログラムや案内にルールや概要を記載するなどの工夫があるとよい。
- ・お弁当作りで疲れてしまったという意見と、お弁当大変だったけどよい思い出になったという意見。
- ・1日開催、開催時期の再検討。

校内でも今回の運動会についてのまとめをおこない、中学校と合同で来年度よりよい運動会になるよう検討していきます。

「学ぶ」とは何か ～ある日の授業から～

ある日、授業の様子を見ていると、下のような算数の問題に取り組んでいました

6本入りのえんぴつの5つ分は何本ですか

児童が個々で考えた後、2名の児童が前に出て自分の考えた「解」を黒板に書き説明をしました。

最初の児童は $5 \times 6 = 30$ 、もう一人は $6 \times 5 = 30$ と答えました。担任から「ちょっと2つは違うけど、みんなはどう思う。」との問いに、多くの児童が「どっちでもいいで～す。」「どっちも同じで～す。」と答えていました。その後、担任が5本組の鉛筆の絵を描きこんだり、前日の授業で学んだ『〇〇の□□つ分はいくつ』と黒板に示したりすると、多くの児童が「 $6 \times 5 = 30$ だ。」と答えていました。そこで授業時間が終了。

もし全校生に同じ問題に取り組ませると、上級生の多くは、直ぐに「 $6 \times 5 = 30$ 」がこの問題の式と答えであることは分かります。ただ、今求められている「学ぶ」は、それだけでは不十分です。

例えば、児童から出た「同じ」というのは何が同じなのか。その「同じ」と考える根拠は何なのかを自分の言葉で表現することが必要です。例えば「何本ですかと聞かれているので、答えの30本が同じだからです。」とか、「6本入りのえんぴつの5つ分だから、 $6(本入り) \times 5(つ分) = 30(本)$ です。」とか、逆に「 5×6 だと、5本入りのえんぴつになります。」などとなります。さらにもう少し深めるためには、教室の中には答えが32とか34と書いている児童がいました。この32本となった理由や、32本ではなく30本であることを自分の言葉で、且つ他の人に伝わる方法で説明できる力が求められます。ちなみに30本以外の答えであった児童の多くは、指を使って答えを導き出しており、この授業中に一言も自分の考えを発言しませんでした。目指すは「私は32になったけどなんでやろ？」と堂々と問える児童を育てる。そういう学級・学校を築き上げることです。

「32」という答えは、もちろん間違っていますが、これから児童たちが生きていく社会は、『未曾有(みぞう)の激しい変化が予測される社会』(文部科学省HP)です。その社会では、答えのない(様に見える)課題に自ら取り組んでいくことが求められます。もしかしたら「間違っていると思われる答え」の中に、新しい「解」が隠れているかもしれません。大屋小学校での「学ぶ」をレベルアップしていかなければなりません。